

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨 本間寛之「麹氏高昌国の国家機構と官制」

麹氏高昌国とは、西暦500年頃～640年までの間、中国の新疆ウイグル自治区トルファン盆地に栄えたオアシス国家で、王族およびその主な住民は漢人である。前漢のときこの地に屯田が始まり、五胡十六国時代に諸国の郡県となり、独立国となり、唐に併合された後は歴代中国王朝の州県下に置かれた。現在、この高昌国の遺跡から行政文書を中心とする大量の“トルファン文書”が出土し、その研究は国際的な競争の下で行われている。本論文はこの文書を主たる資料として、麹氏高昌国の国家機構と官制の分析を通じて、オアシス国家としての麹氏高昌国の真の姿を明らかにしようとするものである。

本論文の構成とその要旨は以下の如くである。序論：本論文全体の研究の位置づけと、各章ごとの研究目的を述べる。第一章「高昌国の地理的環境と出土文書」：本研究の予備作業として、トルファン盆地の地理的・歴史的背景を論述し、またトルファン文書を初めとする種々の文字資料の特徴、その研究史上の意義について述べる。第二章「麹氏高昌国の文書形式と中央行政機構」：官庁文書の中でとくに明確な書式をもつ公文書を上奏文書・辞文書・符文書に分類し、それぞれの特徴を検討する。そしてこれらの三文書の書式を抽出し、それぞれの文書作成にかかわる官員をA群官員・B群官員に区別する。第三章「中央行政機構」：第二章において分類された公文書の内容、作成過程を分析し、次のことを明らかにする。①A群官員は如上の三種の公文書を取り次ぐのに少なくとも一人で良く、複数人による組織的な取り次ぎシステムは存在しない。A群官員は国王と個別的に結びついているようである。②中原王朝のような門下省・中書省的な要素は見出せない。③B群官員の方は、兵部・民部・屯部等の部署に分かれ、また郎中・長史・司馬・主簿・吏という序列が存在する。④麹氏高昌国では庶人が国王に直接上申することができた。以上の検討結果から、麹氏高昌国の中央官制が三省的な要素がきわめて希薄で、中原王朝的な三省と対比されるようなものではないと指摘する。第四章「地方行政機構」：地方郡県に関わる文書として、下行文書の符、上行文書の上奏文書が存在することを述べ、それが作成される過程の文書の動きを検討して、次のことを指摘する。①郡県における最低限の官員は各曹官員、将、雜号將軍である。②地方長官の郡太守・県令が遙任化していることは、すでに指摘されているが、それは必ずしも完全な名譽職ではなく、中央官として国政に参加している。③中央から地方への命令の伝達では、実際にはA群官員による取り次ぎが重要であった。④地方長官の遙任化のため、司馬主者が実質的にその地位にあった。⑤中央・地方間のこうしたA群官員と司馬主者の関係を示すものが、『周書』異域伝高昌条の「每城遣司馬・侍郎相監檢校、名為城令」の文である。第五章「麹氏高昌国の官号」：文書中にみえる將軍号・A群官号・B群官号・地方官号等、複数の官号の組合せの検討を通じて、將軍号を主たる指標として官号間の序列を復原する従来の研究に対して、「將軍号は単独で本官となりうる官号」とするなど、独自の新たな解釈を提示する。第六章「麹氏高昌国の人民と国家」：麹氏高昌国では官号のない無官者も存在し、その性格と実態を分析する。麹氏高昌国では徴税のため土地所有者のグルーピングが行われている。その筆頭にくる者は吏民の身分差によるものではなく、官位の低い者や無官者も筆頭になりえた。また無官の庶人で官庁内の仕事に従事し、没後に官号が追贈され、官人として扱われる場合もあった。ここに麹氏高昌国の人民把握の特徴の一端が看取される。第七章「高昌国周辺国家の国家機構」：麹氏高昌国とその周辺諸国との交渉を検討し、南朝との交渉もあったことを指摘する。「結論」：これまでの麹氏高昌国に対する研究が、中原王朝の統治機構を祖述する形で行われてきたことを批判し、漢人によって建てられた典型

的なオアシス国家であったと総括する。

本論文は当該国家に関する文献史料の不足を、一次資料のトルファン文書を中心とする出土文字資料によって補い、詳細に分析したところに最大の特徴がある。そしてその検討を通じて、浮上してきたことは、あくまでオアシス国家としての姿である。トルファン文書が漢語・漢文で書かれ、官名はほとんど中国内地に淵源を持つものを採用し、文書の書式名、行政用語もまた漢語であって、中国中原王朝との共通性が高い。それ故にこれまでは中原王朝の原則にとらわれ、それを祖述するかたちで高昌国を捉えてきた。しかし、高昌国は実際にはタリム盆地西域諸国との共通点の多い国家であり、漢語漢文によって記された姿はあくまで文字上に現れた表皮にすぎないことを、本論文は具体的に論証している。本論文によって、麹氏高昌国のとらえ方の一つの基本的な方向が示されたと言って良いであろう。以上の諸点を勘案して、本論文を博士（文学）の学位に値するものと判断する。

2007年1月19日

主任審査委員

早稲田大学教授

博士（文学）早稲田大学 工藤 元男

早稲田大学教授

岡内 三眞

早稲田大学名誉教授

文学博士（早稲田大学） 長澤 和俊